

What's New From ASCIKU

関西大学科学技術振興会 No.2 July 2007

「理工学国際シンポジウム 2007」を開催、参加 7月31日(火)～8月1日(水)

7月31日、8月1日の二日間、本学の協定大学であるチュラロンコン大学(タイ)との学術交流を進めるなか、同様に協定大学であるタマサート大学(タイ)、マレーシア科学大学(マレーシア)の研究者、さらにタイの研究機関であるタイ国立金属技術センター(MTEC)が加わり、ASEAN諸国の研究者、大学院生が一堂に会して、「環境とライフサイエンス」をメインテーマとした国際シンポジウムが開催されました。



当シンポジウムは、関西大学工学研究科・理工系3学部主催、社会連携推進本部・先端科学技術推進機構共催、近畿経済産業局・関西大学科学技術振興会後援で開催され、教育・研究における国際的研究感覚のある研究者としての素養を身につける機会を提供することを目的とし、当会の後援により関連企業も参加し、ASEAN諸国の企業との産学官連携活動の促進にも寄与することとなりました。

タイ・マレーシアからの招聘者30名は、7/30(月)関空着、海遊館見学後、大学近隣のホテルで休憩。夕刻、

大学で森本理事長・河田学長等ご臨席の元にウェルカムパーティーに臨み、森本理事長から歓迎のご挨拶を頂戴しました。

シンポジウムの幕開けは、100周年記念会館ホールでのオープニングセレモニー。学長、土戸工学研究科長、Y.Nantaya チュラロンコン大学石油化学工学科長のご挨拶の後、田村裕教授の基調講演、ポスターセッション、各セッションへと移った。参加者は延べ348名に上り、招聘の各大学・研究機関の研究者および大学院生からの研究発表を含め、本学からの教員・大学院生たちも全て英語による発表であり、いずれのセッションにおいても活発に意見交換が行われた。



参加者からの声として、本学の大学院生たちにとっての国際シンポジウムは、プレゼンテーション能力の向上に大変役立ったものと思われる反面、コミュニケーション不足も痛感したことが上げられる。これらの経験は、ASEAN 諸国における日本の果たす役割を考える下地となって、これからの日本社会、技術革新を支え発展させる有為の人材に育って行くであろうとの期待を膨らませるに充分と思われる。

また、研究者にとっても互いに実りある国際交流の場となったと推察される。



8/1 盛会裡にシンポジウム終了後の午後、招聘者達はセッション参加教員の研究室訪問や、梅田界限での買い物などで過ごした。夕刻、振興会主催で会長・副会長ご夫妻をはじめ本学関係者が招聘者をお迎えし、大阪の夜景を船上から眺め、帝国ホテルのディナーを楽しみ、素晴らしい日本の、そして水都大阪の良い印象をお持ち帰り戴くべく、和やかな大川ディナークルージングを催した。

Y.Nantaya チュラロンコン大学石油化学工学科長はじめ招聘者の方々を含む集合場所に、本学の大学院生が両国の大学院生の見送りに集まり、別れを惜んでいた様子が印象的であった。

マレーシア工業開発庁アズマン大阪事務所長様、当シンポジウム開催にご尽力を戴いた実行委員の方々、さらに 06 年度振興会上海・バンコク訪問研究会参加の役員・当会員をご招待し、総勢 65 名で大いに親交を暖めた。



異国の地でのシンポジウムを終えた安堵感、開放感から大学院生同士は船上にて写真を取り合ったり、肩を組み話に弾み、本当に和やかで国際交流の真髄を見た思いがした。

昨年振興会初の海外研究会「上海・バンコク訪問研究会」が一つの契機となり、この度のシンポジウム開催へと昇華し、さらに来年はマレーシアを候補とした海外研究会第 2 弾の話が早々と飛び交うなど、人の絆、交流の機会は着実に大きな連鎖を生み出そうとしている。

最後に、当シンポジウム開催に当たり、ご尽力を戴いた戸倉清一社会連携推進本部特別顧問、田村 裕実行委員長をはじめ理工系 3 学部の実行委員の方々、関係の皆様は厚く御礼を申し上げます。



「日本経済とトヨタの課題」博修士会 井川トヨタ専務氏講演会に参加 7月28日(土)

関西大学博修士会の平成19年度総会における学術講演会が下記のとおり開催され、当会も後援し、会員も多数参加された。博修士会総務部長である、中原住雄システム理工学部准教授から次の講演内容をご寄稿戴きました。

2007年7月28日(土) 15:00~16:00

関西大学第1学舎5号館E401教室

講師：トヨタ自動車(株)専務取締役生産技術本部長 井川 正治 氏

演題：「日本の経済とトヨタの課題」

7月28日(土)に関西大学博修士会は、関西大学社会連携推進本部と関西大学科学技術振興会の協賛を受け、さらに関西大学機友会の協力を得て学術講演会を催した。

講師はトヨタ自動車(株)専務取締役生産技術本部長の井川正治氏であった。井川氏は関西大学の工学部機械工学科出身でかつ、同大学大学院の修士課程を修了されている。聴衆は約200名と博修士会の講演会では始めて以来の大聴衆となった。講演者の名前バリューもあったが、これもひとえに社会連携本部、科学技術振興会、機友会が、また、校友会の機関誌関大や関西大学のホームページでアピールして頂いたお陰であると感謝致しております。

演題は「日本の経済とトヨタの課題」、パワーポイントで動画を交え、約1時間講演された。講演前の打ち合わせでは、「ご要望の時間通りやりますよ」と言って頂き、「与えられた時間いっぱいを使って下さい」と御願したところ、時間通り旨くまとめられ終えられた。そのあたりは常々時間との戦いの中に置かれている姿が覗かれた。



講演内容の最終の局面では、「現在国内で370万台の販売量に対し、トヨタは昨年、普段の生産能力は380万台であるところを、現場に無理言って420万台製造してもらった」とのこと。「これを今後続けるか否かがトヨタの課題である」と述べられた。

「この製造能力を維持恒常化していくためには、40万台以上の生産能力を持った工場を日本のどこかに造る必要がある、このことが具現化するとたぶん日本経済は活性化するだろう」と述べられた。「世界に通用するためには日本の製造業の頑張りはもちろんのこと、国をあげて製造業の全体の活性化を考えて頂くとか、良い教育を大学でして頂いて良い

エンジニア、経済概念の豊富な学生を送り出して頂くことが非常に大事だ」と述べられた。

最後に学生さんからの質問に真摯に答えられる姿に大聴衆の目は講演者一点に注がれた。久々の迫力ある講演内容であった。

天神祭に参加 7月25日(水)

天神祭のフィナーレを飾る船渡御、奉納船鳳講の船に振興会前いの法被を羽織り機構研究員・当会会員の20名が乗船し、三大祭りの一つ、天神祭を堪能しました。鳳神輿に乗せた鳳講は、御霊を祀る講の一つで格式が高く、乗船できるのは限られた方となります。

川面に揺れる篝火とともに、昨年より千発多い5,000発打ち上げられる花火により、夜空を彩る大川の船旅を楽しみました。

船と船がすれ違うたび、「大阪じめ」で祭り気分は盛り上がり、校友会の「関大丸」とは更に熱を込め、最高潮に。



ASCIKU 関西大学科学技術振興会

Associative Society for the Collaboration between Industries and Kansai University